

神鷺之卷

泉鏡花作

—

白鷺明神の祠へ——一緑の森を其の峰に仰いで、小縣銑吉がいざ詣でようとすると、案内に立ちさうな村の爺さんが少なからず難色を顯はした。

此の爺さんは、

「——おらが口で、更めていふではねえがなす、内の媪は、へい一通りならねえ巫女でがすで。」

若い時は、渡り仲間の、のらもので、獵夫を片手間に、小賭博なども遣るらしいが、そんな事より、古女房が巫女といふので、聞くものに一種の威力があつたのはいふまでもない。

またその媪巫女の、巫術の修煉の一通りのものではない事は、讀者にも、間もなく知れよう。

一體、孫八が名ださうだ、此の爺さんは、つい今しがた、この奥州、關屋の在、舊――街道わきの古寺、西明寺の、見る影もなく荒涼んだ亂塔場で偶然知己になつたので。それから――無住ではない、住職の和尚は、齋稼ぎに出て留守だつた――その寺へ伴はれ、庫裡から、こゝに准胝觀世音の御堂に詣でた。

いま、其の御厨子の前に、わづかに二三疊の破疊の上に居るのである。

さながら野晒の肋骨を組合はせたやうに、曝れ古びた、正面の閉した格子を透いて、向う峰の明神の森は小さな堂の屋根を包んで、街道を中に、石段は高いが、恰も、つい其處に掛けた、一面墨繪の額、いや、ざつと彩つた繪馬の如く望まるゝ。

明神は女體におはす――爺さんがいふのであるが――それへ、詣づるのは、石段の上の拜殿までだが、其處へ行くだけでさへ、清淨と齋戒がなければならぬ。奥の大巖の中腹に、祠が立つて、恭

しく齋いっ祭まつつた神像しんざうは、大深秘だいしんぴで、軽々かる／＼しく拜をがまれ
ない。――だから、参まゐつた處ところで、其その効かひはあるま
い……と行ゆくのを留とめたさうな口吻くちぶりであつた。

「極内々ごくない／＼の事ことでがすかなす、明神様みやうじんさまのお姿すがたといふ
のはなす。」

時ときに、勿體もつたいないが、大破落壁たいはらくへきした、この御堂みだうの壇だん
に、觀音くわんのんの緑髮りよくはつ、朱唇しゆしん、白衣びやくえ、白木彫しらきほりの、み姿すがたの、
片扉金具かたとびらかなくの抜ぬけて、自おのづから開ひらいた厨子づしから拜はいされて、
誰たが捧さぐげたか、花瓶くわびんの雪ゆきの卵うの花はなが、其そのまゝ、御みそ
袖で、裳もすそに紛まがひつゝ、銚吉せんきちが参まゐらせた蠟燭らふそくの灯ひに、格がう
天井てんじやうを漏もる晝ひるの月影つきかげの如ごとく、ちらちらと薄青うすあをく、ま
た金色こんじきの影かげがさす。

「なす、この觀音様くわんのんさまに、よう似にてござらつしやる、
との事ことでなす。」……

たゞ此この觀世音くわんぜおんの麗相れいさうを、やゝ細面ほそおもてにして、玉たまの
皓しろきが如ごとく、そして御髮みくしが黒くろく、やつぱり唇くちびるは一點いってん
の紅こうである。

その明神は、白鷺の月冠をめて居る。白衣で、袴は、白とも、緋ともいふが、夜の花の朧と思へ。……

どの道、巖の奥殿の扉を開くわけには行かないのだから、偏に觀世音を念じて、彼處の面影を偲べばよからう。

爺さんは、とかく、手に取れさうな、峰の堂——
繪馬の裡へ、銚吉を上らせまいとするのである。

第一可恐いのは、明神の拜殿の蔀うち、すぐの承塵に、いつの昔に奉納したのか薙刀が一振かゝつて居る。勿論誰も手を觸れず、何時研いだ事もないのに、切味の鋭さは、月の影に翔込む梟、小春日になく山鳩は構ひない。いたづらものゝ野鼠は眞二つになつて落ち、ぬたくる蛇は寸断になつて蠢くほどで、蟲、獸も、今は恐れて、床、天井を損はない。

人間なりとて、心柄によつては無事では濟まない。豫て禁断であるものを、色に盲ひて血氣な徒が、分

別を取はづし、夜中、御堂へ、村の娘を連込んだものがあつた。隔ての帳も、簾もないのに――

――それが、何と、明い月夜よ。明神様もけなりがツつると、二十三夜の月待の夜話に、森へ下弦の月がかゝるのを見て饒舌つた。不埒を働いてから十五年四十を越えて、それまでは内々恐れて、黙つて居たのだが、――祟るものか、此通り、と鼻をさして、何の罰が當るかい。――舌も引かぬに、天井から、青い光がさし、其の百姓屋の壁を抜いて、散りかゝる柳の刃がキラリと座のものゝ目に輝いた時、色男の顔から血しぶきが立つて、そぎ落された低い鼻が、守宮のやうに、疊でピチ／＼と刎ねた事さへある。

いま現に、町や村で、ふなあ、ふなあ、と鼻くたで、因果と、鮎鱈を賣つて居る、老ぼれがそれである。

村若衆の堂の都合は、ありさうな事だけれど、こんな話は何處かに類がないでもなからう。

しかし、尚ほ押重ねて、爺さんが言つた、・・・
・次の事實は、少からず銚吉を驚かして、胸さきをヒヤリとさせた。

餘り里近な所爲であらう。近頃では場所が移つたが、以前は、あの明神の森が、すぐ、いつも雪の降つたやうな白鷺の巣であつた。近く大正の末である。一夜に二件、人間二人、もの凄い異状が起つた。

その一人は、近國の門閥家で、地方的に名望權威があつて、我が儘の出来る旦那方、人に、鳥博士と稱へられる、聞こえた鳥類の研究家だ。家には、鳥屋といふより、小さな博物館ぐらゐの標本を備へもし、飼つても居る。近縣近郷の學校の教師、無論學生たち、志あるものは、都會、遠國からも見學に來り訪ふこと、須賀川の牡丹の觀賞に相齊しい。で、いづれの方面からも許されて、其の旦那の紳士ばかりは、獵期、禁制の、時と、場所を問はず、學問のためとして、任意に、得意の獵銃の打金をカチンと打ち、生きた的に向つて、ピタリと照準する事が出来る。

時に、其の年は、獲ものでなしに、巢の白鷺の産卵と、生育状態の實驗を思立たれたと言ふ。・・・
・ 雞ツ子はどんなだらう。鶏や、雀と違つて、たゞ聞いても、鴛鴦だの、白鷺のあかんぽには、博物に殆ど無關心な銚吉も、聞きつゝ、早く先づ耳を傾けた。

在所には、旦那方の泊るやうな旅館がない。片原の町へ宿を取つて、鳥博士は、夏から秋へかけて、その時々。足繁くなると、殆ど毎日のやうに、明神の森へ通つたが、思ふ壺の巢が見出せない。

—— 村に獵夫が居る。獵夫といつても、南部の猪や、信州の熊に對するやうな、本職の、またぎ、おやぢの雄ではない。のらくらものゝ隙稼ぎに鑑札だけは受けて居るのが、いよゝ獲ものに困ずると、極めて内證に、森の白鷺を盗み撃する。人目を憚るのだから、忍びに忍んで潜入するのだが、いや、何うも、我折れた根氣のいゝ事は、朝早くでも、晩方でも、日が暮れたりと雖もで、夏の末の或夜などは、まゝよ宿鳥なりと、占めようと、右の獵夫が夜中眞

暗な森を彷徨ふうちに、青白い光りものが、目一つ
の山の神のやうに動いて來るのに出撞した。けだし
光は旦那方の持つ懐中電燈であつた。が、其の時の
鳥旦那の装は、杉の葉を、頭や、腰のまはりに結び
つけた、面まで青い、森の惡魔のやうに見えて、獵
夫を息を引いて驚倒せしめた。旦那の智慧によると、
鳥に近づくには、季節によつて、樹木と同化するの
と、また鳥と略服装の彩を同うするのが妙術だとい
ふ。

それだから一夜に事の起つた時は、冬で雪が降つ
て居たゝめに、鳥博士は、帽子も、服も、靴まで眞
白にして居た、と話すのであつた。

(?)

處で、鳥博士も、獵夫も、相互の仕事が、兩方と
も邪魔にはなるが、幾度も顔を合はせるから、逢へ
ば自然と口を利く。「こゝのおつかひ姫は、何だ
な、馬鹿に恥かしがり屋で居るんだな。なか／＼産
む處を見せないが。」「旦那、飛でもねえ罰が當
る。」「撃つやつと何うかな。」段々秋が深く

なると、「これまでののは渡りものの、やす女だ、侍女も上等のになると、段々勿體をつけて奥の方へ引込むな。」従つて森が奥になる。「今度見つけた巢は一番上等だ。鷺の中でも貴婦人となると、産ば雪の中らしい。人目を忍ぶんだな。産屋も奥御殿といふ處だ。」「やれ、罰が當るてば、旦那」

「撃つやつとどうかな。」——雪の中に産育する、そんな鷺があるか何うかは知らない。爺さんの話のまゝ——獵夫が此の爺さんである事は言ふまでもなからうと思ふ。さて獵夫が、雪の降頻る中を、朝の間に森へ行くと、幹と根と一面の白い上に、既に縦横に靴で踏込んだあとがあつた。——

畜生、こんなに疾くから旦那が来て居る。博士の、静肅な白銀の林の中なる白鷺の貴婦人の臨月の觀察に、ズドン！は大禁物であるから、睨まれては事こはしだ。一旦破寺——西明寺は其の頃は無住であつた——その庫裡に引取つて、爐に焚火をして、辨當を使つたあとで、出直して、降積つた雪の森に襲ひ入ると、段々に奥深く、やがて向うに青い水が顯はれた、土地で、大沼といふのである。

今はよく晴れて、沼を圍んだ、樹の袖、樹の裾が、
大なる紺青の姿見を抱いて、化粧するやうにも見え、
立圍つた幾千の白い上藪が、瑠璃の咬殿を繞り、碧
橋を渡つて、風に舞ふやうにも視められた。

此の時、煩惱も、菩提もない。丁ど汀の銀の蘆を、
一むら肩でさらりと分けて、雪に紛ふ鷺が一羽、人
を拂ふ言傳がありさうに、すらりと立つて歩む出端
を、噫、噫、噫、こんな日に限つて、ふと仰がるゝ、
那須嶽連山の嶺に、忽ち一朵の黒雲の湧いたのも氣
にしないで、折敷にカンと打つた。キヤツ！ と若
い女の聲。魂ぎる聲。

這つたか、飛んだか、這つたか。獵夫が目くるめ
いて驅付けると、凍てぎまの白雪に、ぼた、ぼた、
ぼたと紅が染まつて、何處を撃つたか、黒髪の亂れ
た、うつくしい女が、仰向けに倒れ、もがいた手足
を其のまゝに亂れ敷いて居たのである。

いやが上の恐怖と驚駭は、わづかに四五間離れた
處に、鳥の旦那が眞白なヘルメット帽、警官の白い

夏服で、腹這になつて居る。「お助けたー」
旦那、薬はねえか。」と自分が救はれたさうに手を合せた。が、鳥旦那は「――鷺が若い女になる――」
「――そんな魔法は、俺が使つたぞ、といふやうに、知らん顔して、遠めがねを、それも白布で巻いたので、熟と何處かの樹を枝を凝視めて居て、ものも言はない。」

獵夫は最期と覺悟をした。

其處で、急いで我が屋へ歸つて、不斷、常住、無益な殺生を、するな、なせそと戒める、古女房の老巫女に、悄悄と、青くなつて次第を話して、
・・其の筋へなのつて出るのに、すぐに梁へ掛けたさうに禪をしめなほすと、梓の弓を看板に掛けて家業にはしない、茅屋に隠れては居るが、うらなひも祈祷も、其の道の博士だ――と言ふ。何ういふものか、正式に學校から授けない、ものの巧者は、學士を飛越えて博士になる。博士神巫が、亭主が人殺しをして、唇の色まで變つて震へて居るものを、そんな事ぐらゐで留めはしない。・・・冬の日の

暗い納戸で、絲車をじい……。じい……。
村も浮世も寒さに喘息を病んだやうに響かせながら、
獵夫に眞裸になれ、と齒莖を緊めて嚴に言つた。經
帷子にでも着換へるのか、そんな用意はねえすべ
い。……。井戸川で凍死でもさせる氣だらう。
しかし其の言の通りにすると、蓑を着よ、そのやう
な其の羅紗の、毛くさい破帽子などは脱いで、菅笠
を被れといふ。そんで、へい、芋殻か、青竹の杖で
もつくか、と聞くと、それは、ついてもつかいでも、
なう、もう一度、明神様の森へ走つて、旦那が傍に
居ようと、居まいと、其の若い婦女の死骸を、蓑の
上へ、膚づけに負ひまして、また早や急いで歸れ、
と少し早めに絲車を廻はして居る。

いや、もう、肝魂を消して、さきに死骸の傍を離
れる時から、那須風が眞黒になつて、再び、日の暮
方の雪が降出したのが、今度行向ふ時は、向風の吹
雪になつた。が、寒さも冷たさも獵夫は覺えぬ。たゞ
面を打つて巴に打ち亂れる紛白の中に、かの薙刀
の刃がキラリと光つて、鼻耳をそがれはしまいか。
幾度立ちすくみになつたやら。

我が手で、鐵砲でうつた女の死骸を、雪を搔いて
膚におぶつた、そ、その心持といふものは、紅蓮大
紅蓮の土壇とも、八寒地獄の磔柱とも、譬へやうに
口も利けぬ。たゞ吹雪に怪飛んで、亡者の如く、ふ
ら／＼と内へ戻ると、媼巫女は、臺所の筵敷に居敷
り、出刃庖丁をドギ／＼と研いで居て、納戸の爐
に火が燃えて、破鍋のかゝつたのが、阿鼻とも焦熱
とも凄じい。．．．「さ、さ、帯を解け、して
の、死骸を俎の上へ、」といふが、石でも銅でも
ない臺所の俎で。．．．媼の形相は、繪に描い
た安達ケ原と思ふのに、頸には、狼の牙やら、狐の
目やら、鼬の足やら、つなぎ合せた長數珠を三重に
捲きながらの指圖でござつた。

．．．不思議といふは、青い腰も血の胸も、
死骸はすつくり俎の上へ納つて、首だけが土間へが
つくりと垂れる。めつたに使つたことのない、大俵
の炭をぶちまけたやうに髻が碎けて、黒髪が散りかゝ
る雪に敷いた。媼が伸上り、じろりと視て、「天
人のやうな婦やな、羽衣を剥け、剥け。」と言ふ。
襟も袖も引き巻る、と白い優しい肩から脇の下まで

仰向けに露はれ、乳へ膝を折上げて、くゝられたやうに、踵を空へ屈めた姿で、柔にすくんで居る。「さ、其の白ツこい、膏ののつた双もゝを放さつしやれ。獸は背中けだものせなかに、鳥は腹とりはらに肉にくがあるといふ事こといの。腹はらから割さかつしやるか、それとも背せから解ひらくかの、」
と何なんと、ひたわなゝきに戦たたかく、獵夫れふしの手に庖丁ほうちやざつを渡わたして、「えい、それ。」媪うばが、女をんなの兩脚りやうあしを餅もちのやうに下したへ引ひくとな、腹はらが、ふわりと動うごいて、胴どうがしんなりと伸のび申まをしたなす。

「觀音くわんのんさま様の前まへだ、旦那だんな、許ゆるさつせえ。」

御厨子みづしの菩薩ぼさつは、ちら／＼と蠟燭らふそくの灯ひに瞬またきたまふ。

――茫然ぼうぜんとして、銚吉せんきちは聞きいて居ゐた。――。

血ちは、とろ／＼と流ながれた、が、氷こほつたやうに、大腸わたこわた小腸こわた、赤肝あかぎも、碧瞻あをぎも、五臟ごぞうは見る見る解とき發あはかれ、續つづいて、首くびを切きれと言いふ。其その、しなりと俎まないたの下したへ伸のびた皓しろ々／＼とした咽喉のどくび首くびに、觸さはると震ふるへさうな細ほそい筋すぢよ、蕨わらび、ぜんまいが、山賤やましづには。口相くちやう應あひ、といつ

て、獵夫だとして、若い時、宿場女郎の、參候もかしくも見たれど、そんなものがたとへにならうか。……若菜の二葉の青いやうな脈筋が透いて見えて、庖丁の當てやうがござらない。容顔が美麗なで、氣後れをするげな、この痴氣おやちと、媪はニヤリ、「鼻をそげそげ、思切つて。え、それでなうてば、こな爺い、人殺しの解死人は免れぬぞ、」と告り威す。——命ばかりは欲しいと思ひ、こゝで我が鼻も薙刀で引そがれう、恐ろしさ。古手拭で、我が鼻を、頸窪へ結へたが、美しい女の冷い鼻をつるりと撮み、〽ぢよきりと庖丁で刎ねると、あゝ、あ痛、焼火箸で掌を貫かれたやうな、その疼痛に、くらんだ目が、はあ、でんぐり返つて氣がつけば、鼻のかはりに、細長い鳥の嘴を握つて居て、俎の上には、たゞ腹を解いた白鷺が一羽蓑毛も、胸毛も、散りぢりに、血は俎の上と、鷺の首と、おのが掌にたら／＼と塗れて居た。

媪が世帯ぶつて、口輕に、「大ごなしが濟んだあとは、わしが手でぶつ／＼と切つておましょ。鷺の料理は知らぬなれど、清汁か、味噌か、焼かうか

の。「と櫓をほだて、鍋を揺ぶつて見せつけて、
「人間の娘も、鷺の婦も、いのち惜しさにかはり
はないぞの。」といはれた時は、俎につくばひ、
鳥に屈み、媼に這つて、手をついた。断つ、断つ、
ふつつりと獵を断つ、慰みの無益の殺生は、断つわ
いやい。

畠二三枚、つい近い、前畷の夜の雪路を、狸が葬
式を真似るやうに、陰々と火がともれて、人影のざ
わ／＼と通り過ぎたのは――真中に戸板を昇い
て居た。――鳥旦那の、凍えて人事不省なつた
のを助け出した、行列であつた。

町の病院で、二月以上煩つたが、凍傷のために、
足の指二本、鼻の尖が少々、とれた、そげた、缺け
た、はて何といはう、もげたと言はう、もげた。

何うも解せぬ。さて、合點のゆかない。現におつ
かひ姫を、鐵砲で撃つた獵夫は、肝を潰しただけで、
無事に助かつた。旦那は先づ不具だ。巢を見るばかり
で、其の祟りは、と内證で聲をひそめて、老巫女

に伺を立てた。されば、明神様の思召しは、鐵砲は避けもされる。また眷屬が怪我に打たれまいものではない。――御殿の閨を覗かれ、あまつさへ、帳が奥の其の奥の産屋を――おみづからではあるまいが――お煩い……との事である。

要するに、御堂の女神は、鐵砲より、研究がおきらひなのである――。

「――萬事、其の氣でござらつしやれよ。」
「勿論です――」

が、まだ其の上にも、銚吉を一人で御堂へ行かせるのは、氣づかひらしくもあり、好もしくない様子が見えた。即ち明神の祠へは、孫八爺さんが一所に行かうといふ。銚吉とても、唯怯かしばかりでもなさうな、秘密と、奇異と、第一、人氣のまるでない其の祠に、入口に懸つた薙刀を思ふと、掛釘が錆朽ちて居まいものでもなし、控への綱など斷切れて居ないと限らない。同行は寧ろ便宜であつたが。

さて、舊街道を――庫裡を一廻り、寺の前から――路を埋めた淺茅を踏んで、横切つて、石段下のたら／＼坂を昇りかゝつた時であつた。明神の森とは、山波をつゞけて、なだらかに前來た片原の町はづれへ續く、それを斜に見上げる、山の端高き青芒、蕨の廣葉の茂つた中へ、ちらりと出た……さあ、いくつぐらゐだらう、女の子の紅い帯が、ふと紅の袴のやうに見えたのも稀有であつた、が、その下なゝめに、草堤を、田螺が二つ並んで、日中の畝うつりをして居るやうな人影を見おろすと、

「おん爺いえゝ。」
と野へ響く、廣く透つた聲で呼んだ。
貝の尖の白髪しらがの田螺たにしが、

「おゝ。」
「爺ン爺いよう。」
「……爺ン爺い、とこくわ――おゝ。」
「媪ン媪が、なあえ、すぐに歸つて、ござれとよ。」

「酒でも餅でもあんめえが、……やあ。」

「知らねえよう。」

「客人と、やい、明神様詣るだと、言ふだあよ

う。

「何でも歸れ、とよう。媪ン媪が言ふだがえ。」

何故か、其の女の子、其の聲に、いや、其の言托
をするものに、銚吉さへ一種の威のあるのを感じた。

「そんでは、旦那」

白髪の田螺は、麥稈帽の田螺に、ぼつりと分れる。

「――何だ、薙刀といふのは、――繪馬の畫――これか。」

あの、爺い。口さきで人を薙刀に掛けたな。銚吉は御堂の格子を入つて、床の右横の破欄間にかゝつた、繪馬を見て、吻と息を吐きつゝ微笑んだ。

しかし、一口に繪馬とはいふが、入念の彩色、塗柄の蒔繪に唐草さへある。尤も年數のほども分らず、納ぬしの文字などは見分けがつかない。けれども、塗柄を受けた服紗のやうなものは、沙綾か、緞子か、濃い紫を其の細工ものに縫込んだ。

武器は武器でも、念流、一刀流などの猛者の手を経たものではない。流儀の名の、静も優しい、婦人の奉納に違ひない。

眉も胸も和になつた。が、こゝへ来てゐるまで、銚吉は實は瞳を据ゑ、唇を緊めて、驚破といはばの氣構をしたのである。何より聞怯ぢをした事は、聊

かたりとも神慮に背くと、靜流がひらめくとともに、鼻を殺がるゝ、といふのである。

これは、生命より可恐い。むかし、悪性の唐瘡を煩つたものが、厠から出て、嚏をした拍子に、鼻が飛んで、鉢前をちよろ／＼と這つた、二十三夜講の前の話を思出す。――其の鼻の飛んだ時、キヤツと叫ぶと、顔の眞中へ舌が出て、もげた鼻を追掛けたといふのである。鳥博士のは凍傷と聞いたが、結果はおなじい。

鼻をそがれて、顔の眞中へ舌が出たのでは、二度と東京が見られない。第一汽車に乗せなからう。

草生の坂を上る時は、日中三時さがり、やゝ暑さを覚えながら、幾度も単衣の襟を正した。

銚吉は、寺を出る時、羽織を、觀世音の御堂に脱いで、着流しで扇を持つた。此の形は、さんげ、さんげ、金剛杖で、お山に昇る力もなく、登山靴で、

嶽を征服するとかいふ偉さも無い。明神の青葉の砦へ、見すばらしく降参をするに似た。が、謹んで其の方が無事でいゝ。

石段も處々崩れ損じた、控綱の欲いほど急では無いが、段の数は、累々と疊まつて、半身を、夏の雲に抽いた、と思ふほど、聳えて居た。

こゝに、思掛けなかつたのは――不斷殆ど詣づるものがない、無人の境だと聞いただけに、蛇類のおそれ、雑草が伸茂つて、道を蔽うて居さうだつたのが、敷石が一筋、すつと正面の階段まで、常磐樹の落葉さへ、五枚六枚數ふるばかり、草を靡かして滑かに通つた事であつた。

やがて近づく、御手洗の水は乾いたが、雪の白山の、故郷の、氏神を念じて、御堂の姫の影を幻に描いた。

すぐ其の御手洗の傍に、三抱ほどなる大榎の枝が茂つて、桧皮葺の屋根を、森々と暗いまで緑に包ん

だ、棟の鯉木を見れば、紛ふべくもない女神である。根上りの根の、譬へば黒い珊瑚礁の如く、堆く築いて、青く白く、立浪を碎くやうに床の縁下へ蟠つたのが、三間四面の御堂を、組棧敷の如く、さながら枝の上に支へて居て、下蔭は忽ち、ぞくりと寒い、根の空洞に、清水があつて、翠珠を湛へて湧くのが見える。

銚吉は其處で手を淨めた。

階段を靜に　ー　寧ろ密と上りつゝ、ハタと胸を衝いたのは、途中までは爺さんが一所に來る筈だつた。鍵を、もし、錠がさゝつて居れば、扉は開かない、と思つたのに、格子は押附けてはあるが、合せ目が浮いて居た。裡の薄暗いのは、上の大樹の茂りであらう。及腰ながら差覗くと、廻縁の板戸は、三方とも一二枚づゝ鎖してない。

手を扉にかけた。

裡の、其の眞上に、薙刀がかゝつて居る筈である。其處で、銚吉がどんな可笑な態をしたかは、凡そ

讀者の想像さるゝ通りである。

「お通しを願ひます、失禮」と云つた。

片扉、とつて引くと、床も青く澄んで朗か。

繪馬を見て、イんで、いま、其の心易さに莞爾としたのである。

思ひも掛けず、袖を射て、稻妻が飛んだ。桔梗、萩、女郎花、一幅の花野が水とゝもに床に流れ、露を縫つた銀絲の照る、彩ある女帯が目を打つと同時に、銚吉は宙を飛んで、階段を下へ匆ね落ちた。再び裾へ翻へるのは、柄長き薙刀の刃尖である。その稻妻が、雨の如き冷汗を透して、再び光つた。

次の瞬間、銚吉の身は、殆ど本能的に大榎の幹を小盾に取つて居た。

何うも人間より蝉に似て居る。堂の屋根うらを飛

んで、樹へ遁げた其の形が。――而して、少時
して、青い顔の目ばかり樹の幹から出した處は、愈々
似て居る。

柳の影を素膚に絡うたのでは、よもあるまい。よ
く似た模様をすら／＼と肩裳へ、腰には、淡紅の伊
達巻ばかり。いまの花野の帯は、黒格子を仄に、端
が靡いて、婦人は、頬のかゝり脚頸の白く透通る、
黒髪のうしろ向きに、ずり落ちた褌を薄く引き、殆
ど白脛に消ゆるに近い薄紅の蹴出しを、たゞなよ／
＼と捌きながら、堂の縁の三方を、其のうしろ向き
のまゝ、する／＼と行き、よろ／＼と還つて、往き
つ戻りつして居る。その取亂した態の、あわたゞし
い中にも、媚しさは、姿の見えかくれる榎の根の莊
嚴に感じらるゝのさへ、却つて露草の根の糸の、細
く、やさしく戦ぎ纏れるやうに思はせつゝ、堂の縁
を往來した。が、後姿のまゝで、やがて、片扉開い
た格子に、ひたと額をつけて、ぢつと留まると、華
奢な肩で激しく息をした。髪が髭の如くさら／＼と
揺れた。その立つて、踏みぐくめつゝも亂れた裾に、
細く白々と鳥の羽のやうな軽い白足袋の爪尖が震へ

たが、半身を扉に持たせ、半ばを取継つて、柄を高
くついた、其の薙刀が倒で・・・刃尖が爪先を
切らうとして居る。

戦は、銃吉が勝らしい。由来いかなる戦史、軍記
にも、薙刀を倒についた方は負である。同時に、其
の刃尖が肉を削り、鮮血が踵を染めて傳はりさうで、
見る目も危い。

青い蝉が、かな／＼のやうな調子はづれの聲を、
「貴女、貴女、誰方にしましても、何事にしまし
ても、危い、それは危い。怪我をします。怪我をし
ます。氣をおつけなならないと。」

髪を分けた頬を白く、手首とゝもに、一層扉に押
當てて、

「あゝゝ」

とやさしい、うら若い、あどけないほどの、うけ
こたへとまでもない溜息を深くすると、

「小縣さん ー」

冴えて、澄み、すこし掠れた細い聲。が、これに

は銚吉が幹の支へを失つて、手をはづして落ちようとした。堂の縁の女でなく、大榎の梢から化鳥が呼んだやうに聞えたのである。

「……小縣さん、ほんとうの小縣さんですか。」

此の場合、聲はまた心持涸れたやうだが、矢張り澄んで、はつきりした。

夏は簾、冬は襖、間を隔てた、もの越は、人を思ふには一段、床しく懐しい。……聞覚えた以上であるが、それだけに、思掛けなさも、餘りに激しい。――

まだ人間に返り切れぬ。薙刀怯えの蝉は、少々震聾して、

「小縣ですよ、ほんとう以上の小縣銚吉です、私です。――此處に居ますがね。……築地の、東京の築地の、お誓さん、きみこそ、いや、あなたこそ、ほんとうのお誓さんですか。」

「えゝ、誓せいですの、誓せいですの、誓せいの身みの果はてなんですの。」

「あ、危あぶない。」

長なが刀なたは朽くち縁えんに倒たふれた。其その刃はの平ひらに、雪ゆきの掌たなを置おくばかり、なよ／＼と崩くづ折をれて、顔かほに片かた袖そでを蔽おほうて泣ないた。身みの果はてと言いふ・・・身みの果はてか。かくては、一いち城じやうの姫ひめか、うつくしい腰こし元もとの――敗は軍ぐんには違ちがひない――落おち人うととなつて、辻つじ堂だうに彷徨さまよつた傳でん説せつを目まのあたり、見みるものゝ目めに、幽い窃えう、玄げん麗れいの趣おもむきがあつて、娑し婆ば近ちかい事ことのやうには思おもはれぬ。

話はなしは別べつにある。今いまそれを言いふべき場合ばあひでない。築つき地の料れう理り店てん梅ばい水すいの娘むすめ分ぶんで、店みせは此この美び人じんのために賑にぎつた。早はやくから銚せん吉きちの戀こひ人ひとである。勿もちろん論ろん、其その戀こひをえ得えたのでもなれば、意いを通つうずるほどの事ことさへも果はたさないうちに、昨さく年ねんの夏なつ、梅ばい水すいが富ふ士じの裾すそ野のへ暑しよ中ちゆうの出で店みせをして、避ひ暑しよかた／＼、お誓せいが其その店みせを預あづかつたのを知しつたゞけで、此この時ときまで、その消せう息そくを知らなかつた次しだい第だいなのである。・・・

その暑中の出店が、日光、輕井澤などだつたら、雲のゆききのゆかりもあらう。こゝは、關屋を五里六里、山路、野道を分入つた僻村であるものを。

―― 實は、銚吉は、これより先き、麓の西明寺の庫裡の棚では、大木魚の下に敷かれた、女持の提紙入を見たし、續いて、准胝觀音の御厨子の前に、菩薩が求兒擁護の結縁に、紅白の腹帯を据ゑた三方に、置忘れた紫の女扇子の銀砂子の端に、「せい」としたのを見て、ぞつとした時さへ、たゞ遙に其の人の面影をしのんだばかりであつたのに。

却つて、木魚に壓された提紙入には、美女の古寺の凌辱を危み、三方の女扇子には、妊娠の婦人の生死を懸念して、別に爺さんに、うら問ひもしたのであつたが、爺さんは、耳をそらし、口を避けて、色ある二品のいはれに觸れるのさへ厭ふらしいので、其のまゝ黙した事實があつた。

たゞ、あだには見過し難い、その二品に對する心

ゆかしと、歸路かへりには必ず立寄たちよるべき心こころのしるしに、
羽織はおりを脱ぬいで、寺てらにさし置おいた事ことだけを　　ー　　言い
ひ添そへよう。

いづれにしても、こゝで、其そのお誓せいに逢あはうなど
とは・・・譬たとへにこまつた・・・間まに合あはせ
に、然されば、箱根はこねで田澤湖たざはこを見みたやうなものである。

「―― 餘り不思議です。お誓さん、眞個のお誓さんなら、顔を見せて下さい、顔を……此方を向いて、」

殆ど樹の枝に乗った位置から、おのづと出る聲の調子に、小縣は自分ながら不氣味を感じた。

きれノゝに

「お恥かしくつて、其方が向けないほどなんですもの。」

泣聲だし、唇を含んでかすれたが、まさか恥かし
いといふ顔に異状はあるまい。およそ薙刀を閃めか
して薙ぎ伏せようとした當の敵に對して、その身構
へが、背後むきになつて、堂の縁を、もの狂はしく
驅廻つたはおるか、いまだに、振向いても見ないで、
胸を、腹部を袖で秘すらしい、といふだけでも、此
の話の運びを辿つて、讀者も、豫め頷かるゝであら
う、此の婦は妊娠して居る。

「私が、其處へ行きますが、構ひませんか。今度は、此方で武藝を用ゐる。高い此の樹の根からだと、すれ／＼だから欄干が飛べさうだから。」

婦は、格子に縋つて、まだ立つた。尚ほその背後向きのまゝで居る。

「しかし、其の薙刀を何とかして下さらないか。何うも、まことに、危いのですよ。」

「いま、其方へ参りますよ。」

落ついて靜にいふのが、遠く、築地の梅水で、お酌ねだりをたしなめるやうに聞えて、銚吉はひとりで苦笑した。すぐに榎の根を、草へ下りて、おとなくしく控へ待つた。

枝がぐれに、ひら／＼と伸び縮みする……といふと蛇體にきこえる、と悪い。細りした姿で、薄い色の褌を引上げ、腰紐を直し、伊達巻をしめながら、襟を搔合はせ搔合はせするのが、茂りの彼方に枝透いて、簾越に薬玉が消えむとする。

やがて、向直つて階を下りて来た。引合はせて居る袖の下が、脇明を洩れるまで、ふつくりと、やゝ圓い。

牡丹を抱いた白鷺の風情である。

見まい。

「水をのみます。小縣さん、私息が切れる。」
と、すぐ其の榎の根の湧水に、きよくに褌を膝に挟んで、うつむけにもならず尋常に二の腕をあらはに挿入れた。榎の葉蔭に、手の青い脈を流れて、すぐ咽喉へ通りさうに見えたが、掬まうとすると、掌が薄く、玉の數珠のやうに、雫が切れて皆溢れる。

「兩掌でなさい、兩掌で……明神様の水でせう。野郎に見得も何にも入りやしません。」
「はい、いゝえ。」

膝の上へ、胸をかくして折りかけた袖を壓へ、やっぱり腹部を蔽うた、その片手を離さない。

「だつて、兩掌を突込まないぢや、いけないぢや

ありませんか。」

「え、あの柄杓があるんですけど。」

「柄杓、」

手水鉢に。

「あ、手近です。あげませう。青い苔だけれど

もね、乾いて居るから安心です、さあ。」

「濟みません、小縣さん、私知つて居ましたんですけど、つい、とつちて了ひましたの。」

「處で……一寸お待ちなさい。此の水は飲

んで差支へないんですかね。」

「え、冷い、おいしい、私は毎日のやうに飲んで居ます。」

それだと毎日此の祠へ。

「あ、あ。」

と、消えるやうに、息を引いて、

「おいしいこと、あ、おいしい。」

唇も青澄んだやうに見える。

「うらやましいなあ。飲んだら此方へ貸して下さい。」

「私が。」

とて、柄を手巾で拭いたあとを、見入つて居た。

「何うしました。」

「髪がこんなですから、毛が落ちて居るといけませんわ。」

「満々と下さい。ありがたい、これは冷い。一氣には舌が縮みますね。」

とぐつと飲み、

「甘露が五臓へ沁みます。」
と清しく云つた。

小縣の顔を、すつと通つた鼻筋の、横顔で斜に視ながら、

「まあ、おきれいですこと。」

「水？・・・勿論！」

「いゝえ、あなたが。」

「あなたが。」

「さつき、繪馬を見ていらつしやいました時もおきれいだと思つたんですが、清水を一息にめしあがる處が、あの……」

「いや、どうも、そりや些と違ひませう。牛肉のバタ焼の黒煙を立てて、腐つた樽柿の息を吹くのと、明神の清水を汲んで、松風を吸つたのでは、それは、いくらか違はなくつては。」
と、はじめて聲を出して軽く笑つた。

「透通るほどなのは、あなたさ。」

「え。」

と無邪氣にうけながら、一寸眉を顰めた。乳の下を且つ蔽ふ袖。

「一度、二十許りの親類の娘を連れて、鬼子母神へ參詣をした事がありますがね、桐の花が窓へ散る、しんとした御堂の燈明で視た、襟脚のよさといふものは、拜んで閉ぢた目も凜として……白さは白粉以上なんです。——前刻も山下のお寺の觀

世音んげおんの前まへで……お誓せいさん——女持をんなもちの薄紫うすむらさきの扇あふぎを視みました。あゝ、こゝへお参まゐりして拜をがんだ姿すがたは、どんなに美うつくしからうと思おもひましたが。」

誓せいはうつむく。

其その襟脚えりあしはいふまでもなからう。

「其その人ひともわかりました。いまおなじ人ひとが、此この明神みやうじん様に籠こもつたのもわかつたのです。が、お待ちなさいよ。繪馬えうまを、私わたしが視みて居ゐた時とき、お誓せいさんは、何ど處こに居ゐて……。」

「えゝ、そして、あの、何なにをしたんだとおつしやいませう。」

つと寄よると、手巾ハンケチを拂はらつた手てで、柄杓ひしやくの柄えの半なかばを取りとりしめた。その半なかばを持もつたまゝ、居處ゐどころをかへて、小縣きがたは、樹きの高根たかねに腰こしを掛かけた。

「言いひますわ、私わたし……ですが、あなたは、あなたは、どうして、此處こゝへ……。」

「おたづね、御尤ごもつとです。――少しすこ氣取きとるやう
だけれど。一寸ちよつと柄がらにない松島見物まつしまけんぶつといふ不ふ了れう簡けんを起おこ
して……其その歸かへり道みちなんです。――先祖せんぞ
の墓はかま参まゐりといふと殊勝しゆしやうですが、それなら、行ゆきみち
にすべき筈はずです。關屋せきやまで來くると、ふと、此この片原かたはら
の在所ざいしよの寺てら、西明寺さいみやうじですね。あすこに先祖せんぞの墓はかのあ
る事ことを、子供こどものうち、爺ぢいさん、祖母ばあさんに聞きいて居あ
たのを思出おもひだしました。勿體もつたいないが、ろくに名なも知しら
ない人ひとたちです。

墓はかは、草くさに埋うづまつて皆分みなわかりません、一家遠國いつかゑんこくへ流る
轉んのうち、無縁同然むえんどうぜんなんですから、寺てらもまた荒れ
て居あますしね。住職ぢゆうしやくも留守るすで、過去帳くわこちやうも見みられない
し、其その寺てらへ歸かへるのを待まつ間に――しかし、そ
ればかりではありません。

――片原かたはらの町まちから寺てらへ來くる途中とちゆう、田畝たんぼなはての道端みちばた
に、お中食處ちゆうじきだころの看板かんばんが、屋根やね、廂むさしぐるみ、朽倒くちたふれに
潰つぶれて居あて、清きよい小流こながれの前まへに、思おもひがけない緋ひ牡丹ぼたん
が、――

お誓は、おくれ毛を靡かし、顔を上げる。

「其の花の影、水岸に、白鷺が一羽居て、それが、斑蝥——人を殺す大毒蟲——みちをしへ、といふんですがね、引脚へて、此の森の空へ飛んだんです。

まだ其の以前、その前ですよ。片原まで来る途中、林の中の道で、途中から、不意に、無理やりに、私の雇った自動車へ乗込んだ、いやな、不気味な人相、赤い服装、赤いヘルメット帽、赤い法衣の男が、男の子四人、同じ赤いシャツを着たのを連れて、獵銃を持つたのがありましたね。勝手な處で、山の下へ、藪へ入つて見えなくなつたのが——此の山續のやうですから、白鷺の飛んだ方角といひ、杜の此のあたりか。づつと奥になると言ひますね、大沼か。どつちかで、夢のやうな話だけれど、神と、魔と、いくさでもはじまりさうな氣がしたものですから。」

銚吉は話すうちに、あはれに伏せたお誓の目が、憤を含んで、屹として、其が無念を引きしめて、一

層青みを帯びたのに驚いた。――思ひしことよ。
悪魔は、お誓の身にかゝはりがないのでない。

「……わけを言ひます、小縣さん、……
……言ひますが、恥かしいのと、口惜いので、
息が詰つて、聲も出なくなりましたら、こんな、私
のやうな、こんな身體に、手をお掛けになるまでも
ありません。此の柄杓の柄を、たゞお離しなすつて
下さい。其のまゝのめつて、人間の青い苔……」

「いや、かうして、あなたと半分持つた、柄杓の
柄は離しません。」

「あの、そのお優しいお心でしたら、きつけの水
を下さいまし……。私は、貴方を……。お
きれいだ、と申しましたわね、ねえ。」

「忘れました、然ういふ申戯をきいて居たくはな
いのです。」

「いえ、串戯じょうだんではないのですが。いま、あの、私わたしは、あの雑刀なぎなたで、此このお腹なかを引破ひきやぶつて、肝きもも臓腑ざうふも………」

その水色みづいろに花野はなのの帯おびが、部下しとみしたの敷居しきみに亂みだれて、お誓せいの背せとともに、むかうに震ふるへて居ゐるのが見みえる。
榎えのきの梢すずみがざわ／＼と鳴なり、風かぜが颯さつと通とほつた。

「――其處そこへ、貴方あなたのお姿すがたが、すつと雲くもからおさがりなすつたやうに………」
「何なに、私わたしなら落おちたんでせう。」

「そして、石段いしだんの上口あがりくちに見みえました。まるで誰だれも来こないのを知しつて、こちらへ参まゐつて居ゐるのですし、土地とちの巧者かうしやな、お爺ぢいさんに頼たのみまして、この二三にさん日にち、来くる人も留とめて貰もらふやうに用意よういをして居ゐましたんですもの！ 思おもひもよらない、参詣さんけいの、それが貴方あなた。格子かうしから熟じつと覗のぞいて居ゐますと、此この水みづへ、影かげもうつりさうな、小縣をがたさんなんですもの、貴方あなたなんですもの。」

其の爺さんにも逢つて居る。銚吉は幾度も獨りうなづいた。

「こんな、こんな處、奥州の山の上で。」

「御同様です。」

「その拜殿を、一旦むかうの隅へ急いで遁げました。正面に奥の院へ通ひます階段と石段と。……・・間は、樹も草も蓬々と茂つて居ます。その階段の下へかくれて、またよく見ました。寸分お違ひなさらぬ、東京の小縣さん　――　おきれいなのが尚ほあやしい、怪しいどころか可恐いんです。　――　ばけものが来た、ばけて来た、畜生、また、来た。ばけものだ！　……　と思つたんです。」

「其の怪ものに、口惜い、口惜い、口惜い目に逢はされて居るんですから。」

「――　畜生　――　」

「と聲も出ないで。」

「はゝあ、忽ち一打……雑刀ですな。」

「明神様のお持料です。それでも持ったのが私です、討てる、切れるとは思ひませんが――畜生

――叩倒してやらうと思つて、」

「切られる分には、まだ、不具です。雑倒されては眞二つです、危い、危い。」

と、いまは笑つた。

「堪忍して下さいな、貴方をばけものだと思つた私は、淺間しい獣です、畜生です、犬です、犬に噛まれたとお思ひになつて。」

「馬鹿なことを……飛んでもない、犬に咬まれるくらゐなら、私はお誓さんの雑刀に掛ければますよ。かすり疵も負はないから、太腹らしく太平樂をいふのではないんだが、怒りも怨みもしやしません。氣やすく、落着いてお話しなさい。あなたは少し何うかして居る、氣を沈めて……あなた

れは、ばけものゝ手て觸さはりかも知しれませんよ。」

其そこ處こで、背せなに手てを置おくのに、みだれ髪がみが、氷こほりのやうに冷つめたく觸さはつた。

「どうぞ、あの薙なぎ刀なたの飛とばないやうに。」

その黒くろ髪かみは、漆うるしの刃やいばのやうにヒヤリとする。

水みづへ、辻すへつた柄杓ひしやくが、カンと響ひびいた。

四

「……小縣さん、女が、女の不束で、絶家を起す、家を立たいー」

「絶家を起す、家を起たい……」

「え、其の考へは、間違つて居ますでせうか。」

「何が、間違ひです。誰が間違ひだと云ひました。

飛でもない、天晴れぢやありませんか。」

「私の父は、此の土地のものなんです。」

「あ、成程」

「——此の藩の一寸した藩士だつたさうなんですが、道樂ものだつたと言ひます。御維新の騒ぎに刀さしをやめたのは可いんですけれど、然ういふ人ですから、堅氣の商賣が出来ないで、まだ——街道が賑かだつたさうですから、片原の町はづれへ、茶屋旅籠の店を出したと申しますの……貴方、こちらへ入らつしやりがけに——その、あの、牡丹、牡丹ですが。」

何故か、引くいきに、聲がかすれて、

「あの咲いて居ります處は、今は田畝のやうになりましたけれど、もと、はなれの庭だつたさうですの……そして——」

牡丹は、父の手しほにかけましたものですつて。……あとでは、料理ばかりにして、牡丹亭といつたさうです。父がなくなりまして……それが人手から人手へ渡つて、あとでは立ちぐされも同様でも、それも、不景氣で、こぼし屋の引取手もなしに、暴風雨で潰れたのが、家の骸骨のやうに路端に倒れて居ますわ。

母は其の牡丹亭ごろの、おかみさん。……そんな事は申しませんが、父とは、大層若くて年が違ひました。

——町あたりの藝者ださうです。ですが、武家の娘だつたせみですか——まだ、私がお腹に……」

ふと耳許をほんのりと薄く染めた。

「お腹のうち、本所に居る東京の遠縁のものによつて生まれて、のちに、浅草で、また藝者をしたんですけれど、なくなりませす時、いまはの際まで、血統が絶える、田澤の家を、田澤の家をと、せめて後を絶さないやうに遺言をしたんです。

私は其の時分、新橋でお酌に出て居りました。十
四や十五の考へで、此の上一本になつて、人の世話
になるにした處で、一人で商賣をした處で、家を立
てるのぞみがありさうに思はれません。だもんです
から、都合をつけて道をかへまして、梅水へ奉公を
しましたのです。自分の口からお恥かしい、餘りあ
からさまのやうですが、つむりのものより、なりか
たちより、少しでもお金を貯めて、小さな店でも出
せませすやうに、その上で、堅氣の養子になる人を、
縁があつたらと、思詰め、念じ切つて居りました。

こんなものでも、一つ家に、十年の餘も辛抱をし
ますうちには、お一人やお二方、相談をして下さる
方のないこともなかつたんですけど、田澤の家の養
子とでは、まるでかけ離れました縁ですもの。冷た

い顔かほして、きつぱりと、お断ことわり申まをしました。それが、心得こころえ違ちがひだつたんです、間違まちがつて居ゐたんです。ねえ。

「間違まちがひではありません。お誓せいさん、しかし、唯たゞ、道みちも一條ひとすぢの上うへだとしたら、家いへを起おこす――血統けつとうを絶たやさない、真しんに立派りつぱな覺悟かくこだけれど、……本當ほんたうは女一人をんなひとりだとすると、何どうしていゝか、それは、學者がくしやでも、教育家けういくかでも、たとへばお寺てらの坊ぼうさんでも、實地じつちに當あたると、八衢やちまたに前途ゆくてが岐わかれて、道みちしるべをする事ことはむづかしい……世よの中なかになつたんですね。」

「まつたくですわ。でも、それも、まだ月日つきひは長ながし……昨日きのふや今日けふの事こととは思おもはなかつたんですのに――昨年さくねん、店みせの都合つがふで裾野すそのの方ほうへ一夏ひとなつまありまして、朝夕あさゆふ、あの、富士山ふじさんの景色けしきを見みますにつけ……ついひとのんびりと、一人ひとりで旅たびがして見みたくなつたんです。一體いったい出不精でぶしやうな處ところへ、お蔭かげ様さま、店みせも忙いそがしいますし、本所ほんじよの伯父おじ伯母おばと云いつた處ところで、ほんの母ははがたよりました寄親よりおや同様どうやうこれといつて

行きたい場所も知りませんものですから、旅をするなら、名ばかりでも、聞いたゞけ懐しい、片原を、と存じまして、十月小春のいゝ時候に、もみぢもさかり、と聞きました。

はじめ、泊りました、この土地の町の旅宿が、まはり合せですか、因縁だか、その宿の隠居夫婦がよく昔の事を知つて居ました。もの珍らしいからでせう、宿帳の田澤だけで、もう、些とても片原に縁があるだらう、といひましてね。

そんなですから、隠居二人で、西明寺の父の墓も案内をしてくれますし。．．．．まことに不思議な、久しく下草の中に消えて居た、街道端の牡丹が、去年から芽を出して、どうしてでせう、今年の夏は、花を持つた。町でも人が澤山見に行き、下の流れを飲んで酔ふといへば、汲んで取つて、香水だと賞めるのもある。．．．．お嬢さん．．．．私の事です。」

と頬も冷たさうに、うら寂しく、

「故郷へ歸つて来て、田澤家を起す、瑞祥はこれで分つた、と下へも置かないで、それは眞個に深切に世話をして、牡丹さん、牡丹さん、私の部屋が牡丹の間。餡子では餘りだ、黄色い白粉でもつけませう、牡丹亭きな子です。お一ついかゞ．．．．さういつて何うかすると、お客にお酌をした事もあるんです。長逗留の退屈ばらし、それには馴れた輕はずみ．．．．」

嘆息も弱々と、

「尤も煩いことでも言へば、其の場から、つい立つて、牡丹の間へ歸つて居たんです。それといふのが、あゝも、かうもと、それから、それへ、商賣のこと、家のこと。隠居夫婦と、主人夫婦、家のものばかりも四人でせう。番頭ですの、女中ですの、入かはり相談をしてくれませう。聞くだけでも楽しみで、つんだり、崩したり、切組みましたり、庭背戸まで見積つて、子供の積木細工で居るうちに、日が経ちます。．．．．鳥居敷をくゞり、門松を視ないと、故郷とはいへない、といはれる通りの氣になつて、おまゐりをしましたり。．．．．逗留のうち、

幾度、あの牡丹の前へ立つたでせう。

柱一本、根太板も、親たちの手の觸つたのが残つて居ませう。あの骨を拾はう。どうしよう。焚かうか、埋めようか。一寸九尺二間を建てるにしても、場所がいまの田畝では何うにもならず。（地藏様の祠を建てなさい、）隠居たちがいふんです。あゝ、いゝわねえ、然うしませうか。

思出しても身體がふるへる。

今年二月の始でした。 東京も、さうだつたつて聞いたんですが、此の邊でも珍らしく、雪の少ない、暖かな冬でした。 今夜の豆轍が濟むと、片原で年を取つて、あかんばも二つになると、隠居たちも笑つて居ました。その晩　ー

暮方

湯上りのいゝ心持の處へ、ちら／＼降出しました雪が嬉しくつて、生意氣に、 それだし、銀座邊、あの築地邊の夜ふけの辻で、つまらない惡

戯づらをされましたおほ覚えもなし、またいたづらに逢あつた
ところで、ところ久ひさしいだけ、門かどなみ知しつて居ゐるん
です。・ ・ ・ ・ 梅水ばいすゐのものですよ。それで大たい概がい、
挨拶あいさつをして離はなれちまいますんですもの、道みちの可こ恐おそさ
は些ちつとも知しらずに居ゐたんです。ー それに牡丹ぼたん
亭ていのあとまでは、つれがありましたり、一人ひとりでも幾いく
度も行いつたり来きたり、屋根やねのない長ながい廊下らうかもおんな
じに思おもつて居ゐましたものですから、コオトも着きない
で、小縣をがたさん、浴衣ゆかたに襟えりつき一枚いちまい何かでー 裙すそ
へ流ながれる水みづ、あの小川をがはも、梅水ばいすゐに居ゐて、座敷ざしきの奥おくで、
水調子みづでうしを聞きく音おとがします。・ ・ ・ ・ 牡丹ぼたんはもう、
枝えだばかり、それも枯かれて居ゐたんですが、降ふる雪ゆきがす
つきりと、白しろい荅つぼみに積つもりました。・ ・ ・ ・ 大輪おほりんな
のも面影おもかげに見みえるやうです。

向むかうへ、小ちひさなお地蔵ぢざう様さまのお堂だうを建たてたら、お提ちやう
灯ちんに蔦つたの紋もん、養子やうしが出で来て、其その人ひとのと、二ふたつなら
嬉うれしいだらう。まあ極きまりの悪わるい。・ ・ ・ ・ 故わざとお
寶錢箱さいせんばこを置おいて、寶珠ほうしゆの玉たま。・ ・ ・ ・ 違ちがつた、其それ
はお稻荷いなり様さま、と思おもつて居ゐるうちに、こんな風ふうに傘かさを
さして、ちら／＼と、藤ふちの花はなだか、鷺さぎだかの娘むすめにな

つて、踊つたこともあつたつけ。　　「傘は、こゝで、疊んだか、開いてさしたかと、うつかりしました。　　「傘を、ひどい力で、上へぐいと引いたんです。天にも地にも、小縣さん、観音様と、明神様のほかには、女の身體で、口へ出して……」

「キリノと齒を噛んで、つと瞼の色が褪せた。」

「癩か。しつかりなさい、お誓さん。」

「さそくに掬つた柄杓の水を、削るが如く口に含んで、

「人間がましい、癩なんぞは、通越して居るんです。あゝ、此の水が、其のまんま、青い煙になつて焼いたつてくれゝばいゝのに。」

「しばらく、聲も途絶えたのである。」

「口惜しいわ、私、小縣さん、足が上へ浮く處を、うしろから、もこん、と抱込んだものを、見ました時。」

「わな／＼と震へたから、小縣も肩にかけて居た手

を離した。倒れさうに腰をつくくと、褌を投げて、片手を苔に、迂らした。

「灰汁のやうな毛が一面にかぶさつた。枯木のやうな脊の高い、蒼い顔した狒々、あの、繪の狒々、その鼻、が又高くて巨いのが、黒雲のやうにかぶさると思ひましたばかり……何にも分らなくなりしました。

あとで　　ー　　息の返りましたのは、一軒家で飴を賣ります、お媪さんと、お爺さんの爐端でした。裏背戸口へ、どさりと音がした切だつた、といふ事です。

どんな形で、投げ出されて居たんでせう。」

褌を引合はせ、身をしめて、

「……のちに、大沼で、とれたといつて、旅宿の臺所に、白い雁が仰向けに、俎の上に乗つたのを、ふと見まして、もう一度ゾツとすると、ひきつけて倒れました事さへあるんです。

「ー ー 其の晩は、お爺さんの内から、ほんの四五町の處を、俵にのつて歸つたのです。急に、ひどい悪寒がするといつて、引被つて寝ました切、枕も顔もあげられずもんですか。悪寒どころですか、身體はやけますやうですのに、冷い汗を絞るんです。其の汗が脇の下も、乳の處も、・・・・・づくづく・・・・・悪臭い、鱧だか、鮫だかの、六月いきれに、すえたやうな臭ひでせう。むしりたい、切つて取りたい、削りたい、身體中がむか／＼して、しつきりなしに吐くんです。」

無理やりに服まされました、何の薬のせみですか、有る命は死にません。ー ー 生きて居るかひはなし・・・・・たゞ西明寺の観音様べお縋りにまゐります。それだつて、途中、牡丹のあるところを視ます時の心もちは、たゞお察しにまかせます。・・・・・何の罪咎があるんでせう、と思ふのは、身勝手な、我身ばかりで、神様や佛様の目で、ごらんになつたら。」

「お誓さん、・・・・・」

聲を沈めて遮つた。

「神、佛の目には、何の咎、何の罪もない。あなたのような人間を、却つて悪魔は狙ふのですよ。幾年目かに朽ちた牡丹の花が咲いた．．．それは嘘ではありますまい。人は見て奇瑞とするが、魔が咲かせたかも知れないんです。反対に、お誓さんが故郷へ歸つた、其の瑞兆が顯はれたとして、然も家の骨に地藏尊を祭る奇特がある。功德、恭養、善行、美事、其只中を狙ふのが、悪魔の役です。どつちにしろ可恐しい、早く其處を通抜けよう。さ、あなたも目をつむつて、勸音様の前へおいでなさい。」

「　　或時、和尚さんが、お寺へ紅白の切を、何ほどか奇進をして欲しいものぢや、とおつしやるんです。寺の用でない、諸人の施行のためぢやけれど、此の通りの貧乏寺．．．え、私の方から、おやくに立ちますなら願ひ申したいほどですわ。三反持つて参りますと、六尺づゝに切りたいが、缺といふものもなし．．．庖丁ではどうであらう。まあ、手で裂いても間に合ひますわ。和尚さんに手

傳つて、三方の上へ重ねました時、つい、それまでは不信心な、何にも知らずに居りました。子育ての慈愛をなさいます、五月帯のわけを聞きまして、時も時、折も折ですし、
・ ・ ・ ・ ・ 観音様。」

お誓が、髪を長く、すつと立つて、麓に白い手を合はせた。

「つい女気で、紅い切を上へ積んだものですから、眞上のを、内證で、そつと、頂いたんです。」

「それは、めでたい。――括構ではないか、お誓さん。」

お誓は榎の根に、今度は吻として憩つた、それと差むかひに、小縣は、より低い處に腰を置いて、片足を前に、くつろぐ状して、

「節分の夜の事だ。對手を鬼と思ひ給へ。が、それも出放題過ぎるなら、怪我・・・病氣だと思つたら何うです。怪我や病氣は誰もする。・・・其の怪我にも、病氣にも障りがなくつて、赤ちやんが、御免なさいよ、ま、出来たとする。昔から偉人

には奇蹟が携はる、日を見て、月を見て、星を見て、いや、些と大道うらなひに似て来たかね。」

袖を開いて扇を使った。柳の影が映りさうで、云得て、聊か可と思つたらしい。

「鶴を見て懐妊した験はいくらもある。所謂、まをし子だと思ひなさい。その上、面倒な口を利く父親なしに、お誓さん一人で育てたら、それが生一本の田澤家の血統ぢやありませんか。然うだ、悪魔などと言つたのは、私のあやまり、豊年の何とかいふ雪が降つて、節分には、よく降るんです。正に春立ならむとする時、牡丹に雪の瑞といひ、地藏菩薩の祥といひ、あなたは授りものをしたんぢやないか、確に然うだ、——お誓さん。」

お誓は淡く又臉を染めた。

「そんな、あの、大それた、高望みはしませんけれど、女の子かも知れないと思ひました。五日、七日、二夜、三夜、観音様の前に静として居ますうち

に、然ういへば、今時、天狗も狒々も居まいし、第一獸の臭氣がしません。くされたといふは心持で、何ですか、水に棲むものゝやうな氣がするし、森の香の、時々峰からおろす松風と一所に通つて來るのも、水神、山の神に魅入られたのかも分らない。えゝ、因果と業。不具でも、蟲でもいゝ。鳶鴉でも、鮒、鱒でも構はない。其の子を連れて、勸進比丘尼で、諸國を廻つて親子の見世ものになつたらそれまで、何うなるものか。・・・然うすると、氣が易くなりました。」

「あゝ、觀音の利益だなあ。」

つと顔を背けると、肩をそいで、お誓は、はらゝと涙を落した。

「其の御利益を、小縣さん、頂いてだけ居ればよかつたんですけれど――早くから、關屋から此の邊かけて、鳥の學者、博士が居ます。」

「鳥の巢に近づくため、撃つために、いろ／＼
な．．．あんな形もする、かうもする．．．
・頭が樹の枝をかぶつたり、かづらや枯葉を腰へ
巻いたり．．．何の気もなしに、孫八ツ
て．．．その飴屋の爺さんが夜話するのを、一
言．．．」

（ ！ ）

「焼火箸を脇の下へ突貫かれた気がしました。扇子をむしつて棄てうとして、勿體ない、観音様に投げうちをするやうなと、手が痺れて落したほどです。夜中に谷へ飛降りて、田澤の墓へ噛みつかうか、とガチ／＼と歯が震へる．．．路傍のつづれ屋を、石油を掛けて焼消さうか。牡丹の根へ毒を絞つて、あの小川をのみ干さうか。

もう拙も．．．大慈大悲に、腹帯をお守り下さいませ、観音様の前には、口惜くつて、もどかしくつて居堪らなくなつたんですもの。悪念、邪心に、

肝も魂も飛上つて・・・あら神様で、崇の鋭い、
明神様に、一昨日と、昨日、今日・・・

――誓たゞひとり此の御堂に――

「獨り居れば、ひとり居るほど、血が動き、肉が
震へて、つきます息も、千本の針で身體中さすやう
です。――前刻も前刻、繪馬の中に、白い女の裸
身を仰向けにくゝりつけ、膨れた腹を裂いて居ます、
安達ヶ原の孤家の、もの凄いのを見ますとね。」

(――實は、其の繪馬は違つて居た――)

「あゝ、嘸ぞ、せい／＼するだらう。あの女は羨
しいと思ひますと、お腹の裡で、動くのが、動くば
かりでなくなつて、もそ／＼と這ふやうな、ものを
いふやうな、ぐつ／＼、と巨きな鼻が息をするやう
な、その鼻が舐めるやうな、舌を出すやうな、蒼
黄色い顔――畜生――牡丹の根で氣絶し
て、生死も知らないで居たうちの事が現に顯はれて、
お腹の中で、土蜘蛛が黒い手を擴げるやうに動くん

ですもの。

帯を解いて、投げました。

え、男に許したのではない。

自分の腹を露出したんです。

芬と、麝香の薫のする、金欄の袋を解いて、長刀

を、此の乳の下へ、平當てにヒヤリと、また芬と、

丁子の香がしましたのです。」

……此の薙刀を、もとのなげしに納める時は、

二人がかりで、それはいゝが、お誓が刃の方を支へ

たのだから、をかしい。

誰も、こゝで、薙刀で腹を切つたり、切らせたり

するとは思ふまい。

——然も、これを取はづしたといふ時に落した

のであらう。女の長い切髪の、いつ納めたか、元結

を掛けて、黒い水引でしめたのが落ちて居た。見て

さへ氣味の悪いのを、静に掛直した。お誓は偉

い！……落着いて居る。

そのかはり、氣の静まつた女に返ると、身だしなみをするのに、一寸手間が取れた。

下じめ　　腰帯から、解いて、しめ直しはじめたのである。床へ坐つて

ちつと擦つたいばかり。かういふ時の男の起居擧動は、漫畫でないと、容易に其の範容が見當らない。小縣は一つ一つ繪馬を視て居た。薙刀の、それから始めて。　　

一度横目を流したが、其時は、投げた單衣の後襟を、かなぐり取つた花野の帯の輪で守護して、其の秋草の、幻に夕映ゆる、蹴出しの色の片膝を立て、それによりかゝるやうに脛をあらはに、おくれ毛を撫でつけるのに、指のさきをなめるのを、ふと見まじいものを見たやうに、目を外らした。

「其の繪馬なんですわ、小縣さん。」
起つと、坐ると、然も背中合せでも、狭い堂の中の一つ處で、氣勢は通ずる。安達ヶ原の・・・

「お誓さん、氣のせみだ。此の繪馬は、俎の上へ
裸體の戀絹を縛つたのではない。白鷺を
羽仰向けにしてあるんだよ。しかもだね、料理をす
るのは、もの凄い鬼婆々ぢやなくつて、鮭の口を尖
らした、とぼけた爺さん。笑はせるな、これは願事
でなくて、殺生をしない戒めの繪馬らしい。」

事情も解めて居る。半ば上の空でいふうちに、小
縣のまた視めて居たのは、其の次の繪馬で。

はげて、くすんだ、泥繪具で一刷毛なすりつけた、
波の線が太いから、海を被いだには違ひない。・
・・・ 鮭かと思ふと脚が見えぬ、鰈、此目魚には、
どんよりと色が赤い。赤鰈だ。が何を意味す
る？・・・・つかはしめだと聞く白鷺を引立たせ
る、待女郎の意味の奉納か。其の待女郎の目が、一
つ、黄色に照つて、縦にきら／＼と天井の暗さに光
る、と見つゝ、且つ其の俎の女の正體をお誓に言ふ
のに、一度、氣を取られて、見直した時、ふと、も
う其の目の玉の縦に切れたのが消えて居た。

斑蝥だ。斑蝥が留つて居た。

「お誓さん、お誓さん。――其の邊に、綺麗

な蟲が一つ居はしませんか、蟲が。」

「えゝ。」

「居る？」

「えゝ。居ますわ。」

バタリと口に啣へた櫛が落ちた。お誓は帯のむすびめをうしろに取つて、細い腰をしめさまに、その引掛けを手繰つて居たが、

「玉蟲でせう、綺麗な。えゝ、人間は、女は淺間しい。すぐに死なゝいと思ひましたら、簪も衣ものも欲いんです。此の場所ですから、姫神様が下さるんだと思ひましてさ、一寸、櫛でおさへました。ツイとそれと、取損つて、見えませんわ。そちらに居ません？玉蟲でせう。」

筐の簪、箆笥の衣、薙刀で割く腹より、小縣は此の時、涙ぐんだ。

いや、懸念に堪へない。

「玉蟲どころか……」

名は知るまいと思ふばかり、その説明の暇もない。

「大變な毒蟲だよ。——支度はいゝね、お

誓さん、お堂の下へおりて下さい。さあ……

其の櫛……指を、唇へ觸りはしまいね。」

「櫛は峰の方を啣へました。でも、指はあの、鬢の毛を撫でつけます時、水がなかつたもんですから、つい……いゝえ、毒にあたれば、神様のおぼしめしです。こんな身體を、構はんですわ。」

一寸なまつて、甘えるやうな口ぶりが、尚ほ、きつぱりと斷念がよく聞えた。いやが上に、それも可哀で、その、いぢらしさ。

「帯にも、袖にも、何處にも、居ないかね。」

再び巨榎の翠の蔭に透通る、寂しく澄んだ姿を視た。

水にも、満つる時ありや、樹の根の清水はあふれ

たり。

「あゝ、さつき水を飲んだ時でなくて可かつた。」
引立てて階を下りた、その葩格子の暗い處に、力
タリと音がした。

「あれ、薙刀がはづれましたか。」

清水の面が、柄杓の苔を、琅の如く、梢もる透
間を、銀象嵌に鏤めつゝ、其のもの音の響きに揺れ
た。

「まあ、あれ、あれ、ご覽なさいまし、長刀が空
を飛んで行く。」

榎の梢を、兎のやうな雲にのつて。

「桃色の三日月様のやうに。」

……と言つた。

松島の沿道の、雨晴れの雲を豆腐に、陽炎を油揚
に見物したといふ、外道俳人、小縣の目にも、これ
を仰いだ目に疑ひはない。薙刀の鋭き刃のやうに、

たとへば片鎌の月のやうに、銀光を帯び、水紅の羅
して、あま翔る鳥の翼を見よ。

「大沼の方へ飛びました。明神様の導きです。彼

處へ行きます、行つて・・・」

「行つて、何うします？行つて。」

「もうこんな氣になりましたは、腹の子をお守り
遊ばす、観音様の腹帯を、肌につけては居られませ
ん。解きます處、棄てます處、流す處がなかつたの
です。女の肌につけたものが一度は人目に觸れるん
ですもの。抽斗にしまつて封をすれば、佛様の情を
仇の女の邪念で、蛇、蛭に、のびちぢみ、ちぎれて、
蜘蛛になるかも知れない。やり場がなかつたんです
のに、導びきと一所に、お諭しなんです。小懸さん。
あの沼は、眞中が渦を巻いて底知れず水を巻込むん
ですつて、爺さんに聞いて居ます・・・」
と、銚吉の袂の端を確と取つた。

「行く道が分つて居ますか。」

「え、身を投げようと・・・二度も、三

度も。――

欄干の折れた西の縁の出端から、袖形に地の靡く、
向うの末の、雑樹茂り、葎蔽ひ、殆ど國を一重隔て
た昔話の音せぬ瀧のやうなのを、猶豫らばず潜る時
から、お誓が先に立つた。おもひのほか、外は細い
路が畝つて通つた。が、小縣は殆ど山姫に半ばを誘
はるゝ思ひがした。故にあとへ退つたのではない、
もう二三尺と思ひつゝ、お誓の、草がくれに、いつ
も其の半身、縞絹に黒髪した遁水の如き姿を追つた
からである。

沼は、不忍の池を、其半にしたと思へば可い。たゞ
周圍に菴鬱として、樹が茂つて暗い。

森をくゞつて、青い姿見が蘆間に映つた時である。

汀の、斜向うへ――巨な赤い蛇が顯はれた。
蘆萱を引伏せて、鎌首を擧げたのは、眞赤なヘルメ
ット帽である。

小縣が追継る隙もなかつた。

衝と行く、お誓が、心せいたか、樹と樹の幹に一寸支へられたやうだつたが、其のまゝ兩手で裂くやうに、水に襟を開いた。玉なめらかに、きめ細かに、白妙なる、乳首の深秘は、幽に雪間の葦を装ひ、牡丹冷やかにくづれたのは、其の腹帯の結びめを、伏目に一目、きり／＼と解きかけつゝ、

「畜生……」

と言つた、女の聲とゝもに、笄が冴えて、銃が響いた。

小縣は草に、伏の構を取つた。これは西洋に於て、いや此頃は、もつと近くで行るかも知れない……爪さきに接吻をしようとしたのではない。ものいふ間もなし、お誓を引倒して、危難を避けさせようとして、且つ及ばなかつたのである。

其の草伏の小縣の目に、お誓の姿が――峰を抽いて、高く、金色の夕日に聳つて見えた。齊しく、野の燃ゆるが如く煙つて、鼻の尖つた、巨なる紳士

が、銃を倒す、と齊しく、ヘルメット帽を脱いで、高くボンと空へ投げて、拾つて、又投げて、落ちると、宙に受けて、又投るのを視た。足でなく、頭で雀躍したのである。忽ち、法衣を脱ぎ、手早く靴を投ると、勢よく沼へ入つた。

續いて、赤少年が三人泳ぎ出した。

中心へ近づくまゝに、掻く手の肱の上に顯はれた鼻の、黄色に青みを帯び、茸のくさりかゝつたやうな面を視た。水に拙いのであらう。喘ぐーし かむ、泡を噴く。が、或は鳥に對する隱形の一術であらうも計られぬ。

「ばか。」

投棄てるやうにいふとゝもに、お誓はよろ／＼と倒れて、うつとりと目を閉ぢた。

早く解いて流した紅の腹帯は、二重三重にわがなつて、大輪の花のやうなのを、もろ翼を添へて、白鷺が、すれ／＼に水を切つて、鳥旦那の來り迫る波

がしらと直線に、水脚を切つて行く。その、花片に、
いや其の腹帯の端に、キラ／＼と、蟲が居て、青く
光つた。

鼻を仰向け、諸手で、腹帯を掴むと、紳士は、ず
ぶ／＼と沼に潜つた。次に浮きざまに翻つた帯は、
翼かと思ふ波を立てて消え、紳士も沈んだ。三個の
赤い少年も、もう影もない。

唯一人、水に入らうとする、ずんぐりものゝ色の
黒い少年を、その諸足を取つて、孫八爺が押へたの
が見える。押へられて、手を突込んだから、脚をば
つたのやうに、いや、ずんぐりだから、蟋蟀のやう
にニいて、頭で臼を搗いて居た。

「ー そろ／＼と歩行いて行き、たゞ一番あ
とのものを助けるやうー」
途中から女の子に呼戻させて置いて、媪巫女、其
の孫八爺さんに命ずるが如くに云、つてー
角を教へた。

ずんぐりが一番あとだったのを、孫八が来て見出したと、もに、助けたのである。

此の少年は、少なからぬ便宜を與へた。――
検する官人の前で、

「――三日以來、大沼が、日に三度づつ、水の色が眞赤になる情報があつたであります。緋の鳥が一羽づつ来るのだと鳥博士が申されました。奇鳥で、非常な価値である。十分に準備を整へて出向つたであります。果して、對岸に眞紅な鳥が居る。撃つたであります。銃の命中した其の鳥は、沼の中心へ落ちたであります。従つて高級なる獵犬として泳いだのであります。」

と明確に言つた。

のみならず、紳士の舌には、斑蝥がねばりついて居た。

一人として事件に煩はされたものはない。
汀で、お誓を抱いた時、惜しや、かはいさうに、

もういけないと思つた。胸に硝薬のほひがしたからである。

水を汲まうとする處へ、少年を促がしつゝ、廻り駈けに駈けつけた孫八が慌しく留めた。水を飲んぢやなりましねえ。山野に馴れた爺の目には、沼の水を見さつせえ、お前等がいつた、毒蟲が、ポカリ／＼浮いてるだ。

明神まで引返す、これにも少年が用立つた。爺さんにかはつて、お誓を背にして走つた。

清水につくと、魑魅が枝を下り、茂りの中から顯はれたやうに見えたが、早く尾根つたひして、八十路に近い、脊の低い柔和なお媪さんが、片手に幣結へる櫛を持ち、杖はついたが、健に來合はせて、

「苦勞さしやつたの。もうよし、よし。」

と、お誓の其ふくよかな腹を、袖の下で擦つて微笑んだ。其處が丁ど結び目の帶留の金具を射て、彈丸は外れたらしい。小指のさきほどの打身があつた。

淡いふすぼりが、媼の手が神を清水にひたして冷す
うちに、プライツツケルの冷罨法にも合へる如く、
やゝ青く、薄紫にあせるとともに、乳が銀の露に汗
ばんで、濡色の睫毛が生きた。

町へ急ぐやうにと云つて、媼は尚ほあとへ残るか
ら、

「お前様は？」

お誓が聞くと、

「姫神様がの、お冠の紐が解けた、と御意ぢや

よ。

これを聞いて、活ける女神が、何故みづからの其
の手にて、などといふものは、烏帽子折を思はるゝ
がいゝ。早い處は、然やうなお方は、戀人に羽織を
きせられなからう。袴腰も、御自分で當て、帽子も、
御自分で取つておかぶりなさい。

神巫たちは、數々、顯靈を示し、幽冥を通じて、俗人を驚かし、郷土に一種の權力をさへ把持すると、今も昔に、そんなにかはりなく、奥羽地方は、特に多い、と聞く。

むかし、秋田何代かの太守が郊外に逍遙した。小やすみの庄屋が、殿様の歌人なのを知つて、家に持傳へた人麿の木像を獻じた。お覚えのめでたさ、其の御機嫌の段いふまでもない。――歸途に、身が領分に口寄の巫女があると聞く、未だ試みた事がない、其へ案内をせよ。太守は人麿の聲を聞かうとしたのである。

しのびで、裏町の軒へ寄ると、破屋を包む霧寒く、松韻颯々として、白衣の巫女が口ずさんだ。

「ほの／＼と・・・」

太守は門口を衝と引いた。「これよ。」「は、

ツ。「巫女に謝儀をとらせい。……あの輩が教化は、士分にまで及ぶであらうか。」泣きみ、笑ひみ……。は、ツ、たゞ婦女子のもてあそびものにござりまする。「然やうか——其儀ならば、……。仔細ない。」

が、孫八の媪は、其の秋田邊の所謂（おかみん）ではない。越後路から流漂した、其の頃は色白な年増であつた。呼込んだ孫八が、九郎判官は恐れ多い。辨慶か、ちやうはん、熊坂ではなく、賽の目の口でも寄せようとしたのであらう。が、其の女振を視て、口説いて、口を遁げられたやけ腹に、巫女の命とする秘密の箱を攫つて我が家を遁げて歸らない。此の奇略は、モスコオの退都に似て居る。悪孫八が勝ち、無理が通つた。それも縁であらう。越後巫女は、水飴と荒物を賣り、軒に草鞋を釣して、こゝに姥塚を築くばかり、あとを留めたのであると聞く。

—— 前略、當寺檀那、孫八どのより申上げ候。入院中流産なされ候御婦人は、いまは大方に快癒、

鬱散のそとあるきも出来侯との事、御一安心下され
度侯趣、さて、こゝに一昨夕、大夕立これあり、孫
八老、其の砌某所墓地近くを通りかゝり候折から、
天地晦冥、雹の降ること凄まじく、且は電光の中に、
清げなる婦人一人、同所、鳥博士の新墓の前にイみ
侯が、冷く莞爾といたし侯とともに、手の壺微塵に
碎け、一塊の鮮血、あら土にしぶき流れ、降積りた
る雹を染め候が赤き霜柱の如く、暫時は消えもやら
ず有之侯よし、貧道など口にいたし侯もいかゞ、相
頼まれ申侯ことづてのみ、いづれ佛菩薩の思召す處
にはこれあるまじく、奇しく厳しき明神の嚮導指示
のもとに、化鳥の類の所爲にもやと存じ候 ー

西明寺

木魚

和尚さんも、貧地の癖に。「木魚」などと酒
落れて居る。が、それはとにかく ー (上人の
手紙は取意の事) 東京の小縣へ此の來書の趣は、
婦人が受辱、胎藏の玻璃を粉碎して、汚血を獵色の

墳墓ふんぼに、たゞき返かへしたと思おもはれぬでもない。

【完】